

家族と家族幻想 2

坂口 伊都



人の行動を左右するもの。

それは何だろう。

価値観、文化、年齢、立場…。

いろいろあると思うが、育てられ方
からも様々な影響を受けているよう
に感じる。

Stay Home が促され、それが緩和されつつもコロナウイルスの第2波を心配する状況下で、このマガジンが発行される頃は、どのような日常になっているのかと思いながら書いています。誰にも先が見えないストレスの中、日常を送るという今までになかった体験を課せられていますが、皆さまお元気でお過ごしでしょうか。私の生活も、な

かなか職場に出向けなくなり、Zoom でミーティングをするように変わりました。まさか、機械に関心がない私が、パソコンの画面を見ながら話をするようになるとは思わなかったです。必要に応じて、人は変化して対応していくもので、これも進化の一つでしょうか。2 月末に企画していた研修も開催できなくなり、1 回延長をして会場を押さえたのですがこれも断念し、Zoom ウェビナーのオンライン研修に切り替えることにしました。たまたま 2 月の研修担当の代役を引き受けることになり、何故かそのままオンライン研修の担当に居残りってしまいました。私の意志とは関係なく、未知なる世界に足を踏み込んでしまい、対応に苦慮しています。

また、私が講師を務める予定だった研修も会場開催は無理なので、ビデオで撮って送ってくださいと言われました。研修時間が 1 時間に短縮になったので、すぐ終わるだろうと高を括っていたのですが、久しぶりに出社したパソコンで状態が悪く、別のパソコンでプロジェクターに繋ごうと思ったら線が違って繋がられません。その線を見つ

け出すのに時間がかかり、やっと繋がったと思ったら、今度は画像が出てきません。この時点で、心の半分が折れていました。何とかビデオ撮影する段取りまでこぎつけ、ビデオ撮影をしようとする
とプロジェクターの画面に虹色の光のノイズ（テレビをビデオで撮ろうとすると出るやつです）。まじかああああ。ノイズの消し方を調べていろいろ試しましたが、ノイズを消すことはできず、あんなに苦労して繋いだプロジェクターは何だったのか。仕方がないので、パソコンにスライドショーを映し、ビデオ撮影すれば何とかかなるかと思いましたが、人と画面のバランスがよろしくない。次の策は、一人 Zoom ミーティングでスライドショーを画面共有すれば、小さく人も映り、録画可能と思いつき、これでやっと撮影に入れました。朝一から始め、撮り終えたのが15時過ぎで、1時間の研修にほぼ1日をかけてしまい、気が遠くなりました。

オンライン化と言えば、娘がこの4月から大学の新生になりましたが、キャンパスに入れないので、ゴールデンウィーク明けからオンライン授業になっています。入学当初は、右も左もわからない中、科目登録をしなければならず、親もシラバスを読み込んで悪戦苦闘。その中、ガイダンスをオンラインですることになり、先生の顔を見て話を聞けて、素直に娘が喜んでいました。顔がわかり、人柄を知ることが新生を落ち着かせるのだなと驚きました。その時からの大学に対する不

安が減って落ち着きました。人が人と繋がることの大きさを感じます。オンライン授業のみならず、9月入学の話やクラスを小規模にしていく等、これまで課題と言われてきたことが、急速に動こうとしているように見えます。

当たり前だと思われていた日常を変えていくことは難しいですが、今回のように外的要因があり、せざるを得ない状況で物事が動くのだなと感じます。新型コロナウイルスが収束した後も社会の変容が残り、新たな仕組みに組み変わっていくでしょう。

緊急事態宣言が出ている状況でも日々の生活の中でも、私たちは何を基準に行動を決めているのでしょうか。人は、誰しも価値観を持ち、そこから行動を決定していることが多いと思います。価値観とは何か。例えば、「健康、金、秩序」の3つの中なら、何を優先させますか？と尋ねられたら、何て答えますか。即座にどれかに決めて答える人もいるでしょうし、具体的な状況が見えないと決められない、あるいはその質問自体が愚問だと言うかも知れません。

今年のゴールデンウィークをガマンウィークと読み替えて言うのを初めて聞いた時、上手いことを言うなあと感じましたが、これだけ気温が上がり、緑も芽生え色とりどりの花が咲き、天候に恵まれれば出かけたくなる気持ちが沸いてきます。海なら大丈夫だろうと出かける人がいるとニュースになると、その海岸に立ち入らないよう看板



が立てられた場所には人はおらず、隣の海岸に人が集まるっていると報道がありました。その一方で家から外に出たらダメなのだと脅迫観念にとらわれる人もいます。何を優先させようとするかで行く手が変わります。その時に抱いている価値観は、年代や置かれている立場によっても違いが出てきますが、その土台は子ども時代に刷り込まれているのではないかと感じる 경우가多くあります。子どもの頃に受けた影響は案外、強く居座っているのかも知れません。

誰もが、自分の生き方はこれでいいのだと思いたい。自分の生き方が間違っている誰かに言われたら、ショックで立ち直れないかもしれない。

生きていくことは、何か信じられるものを探して、背負っていくことかも知れません。

相談を受ける時、子どもが30歳を超えても子どものままであり続け、親は子どもの上に立つ者として居続けてることを良しとするのだなと感じることがあります。その時の親子は、同居や生活圏内を居住地にしている印象を受け、成人した他のきょうだい達も生活圏内に住んでいることがままあります。そこでは、強烈な権限を持つ親の機嫌を損ねないように立ち振る舞ったり、逆に弱弱しい親を囲う、親族の誰かが常に責められる立場にいて、全体のバランスが保たれている等の家族の

背景が見えます。それにプラスをして、〇〇すべきという家族内の共通した価値観が存在しているようです。

例えば、親の言うことは絶対であり、子どもはその言葉を叶えるよう努力したり、従うべきであるという価値観。それが大きくあると、それに逆らう選択肢は悪だと判別され、疑う余地がなくなります。その一方で、苦しみ、悲しみ、怒りといったネガティブな感情と葛藤している姿も見えます。対人援助職と会話をする中で、別の価値観があることを知り、その価値観に納得するが、生活に戻れば親族の揺るがない価値観と向き合わなければならないので、関係性の深さや長きに晒されてきた時間を考えれば、価値観を上書きすることはそう簡単なことではありません。

同じような価値観の中に留めようとする他の親族が落ち着いているかといえば、常にトラブルが起きていました。きっかけは、どこでもあるような些細なことですが、こじれ方が大きくなるのが特徴のようです。

よく耳にする例をあげると、成人した子どもが友人と遅くまで遊び歩いているとその親が厳しく咎めることから始まり、成人した子どもの方は、自分はもう大人で、久しぶりに出かけただけでそこまで言われないとならないのかと言い返すと、あの頃のあなたもそうだったと荒れていた頃を持ち出され、子どもの方が言葉を飲み込み、両者とも不完全燃焼のままその日は幕を閉じます。そして数日後、パッと着火するかのように激しく再燃。成人した子どもは親に自分の気持ちをわかって欲しいと必死になりますが、親の方は全く聞く耳を持たず、最終的に子どもの方が言葉を飲み込み、自分が悪いのだから仕方がないのだと己を宥め、諦めることに必死になると同時に親に認めてもらえないことの傷を深めていました。親との関係に葛藤しながらも成人した子どもは、親とスープが冷めない距離で暮らすことを選択し続けていたので、生活圏の外に住むという選択肢を考えたこと

があるか尋ねると、自分一人でやっていく自信がないと言葉を濁します。袋小路をぐるぐると回り続ける終わりのない日々がそこに見えてきました。

この親子には、子どもの自立という発想を横に置いて、永遠に続く不動の親子関係を作っていました。子どもは、大人になって自立するという社会一般の価値観をこの親子も知っていましたが、親の方は子どもがまた荒れていた頃に戻るのではないかと不安になり監視下におきたがり、成人した子どもの方は、親に認めて欲しい、わかって欲しい、愛して欲しいという思いが膨れ上がり、そのことで手一杯になっているように見えました。常日頃からお前はダメな奴、いつまでも半人前、周りにどれだけ迷惑をかけてきたかと周囲から言われ続ければ、自分が一人でやっていけるわけがない、親の近くにいないければ自分はやっていけない人間なのだと思い込んでいくのもわかります。そこに子どもの頃から続けてきた大人の顔を見て、機嫌を損ねないようにしてきた習慣と親が寂しくならないように近くにいることが親孝行なのだという価値観等が下支えとなると関係を維持していくことができるようです。

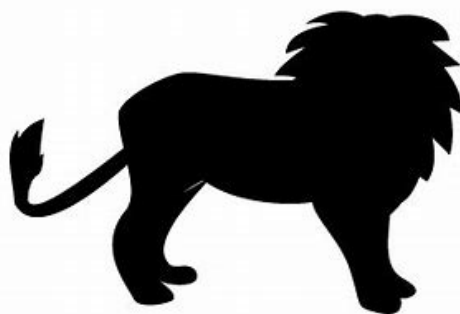
価値観を維持するためには、「正しい」や「間違っていない」という思いが必要になります。その確認ために、周りと答え合わせをし、周りが正しいと言っているのだから間違っていない、大丈夫だと安堵します。その考えを揺るぎないものにする方が自分にとって都合がいいですから、強固なものにしていこうとします。周りに同調者が複数いれば、その思いは間違っていないと自信になり、自分達とは違う意見を主張する他者を間違っていると認識します。疑う余地がない程それは、融通が利かないものになっていき、世の中に溢れる多様な選択肢の存在を見ないようにするでしょう。仮に他の価値観の多様さを認めようとすれば、今まで信じ疑わなかった己の世界が崩れることになるのでしません。自分が信じてきたものが違うのではないかと思うことに不安を感じない人間など

いません。

こうして世の中は、個人の正義で満ちていきます。戦争も「正義 VS 正義」でぶつかり合い、相手を悪と認識することで成立してます。誰もが自分を正義だと信じたい。子ども達に聞かせる昔話も悪と正義が分かれ、正義でいることを良しとして教えています。誰もが、自分のしていることは正義の味方に分類されるはずだと行動に理由や屁理屈をくつつけるいることも多いのではないのでしょうか。

そう感じる一つに、いつまで経っても途切れることの無い下手くそな謝罪会見があります。少し考えれば、違うやり方も見えてくれるだろうにと思いますが、当人は己の言動が矛盾していることを見失い、正義の味方に居続けるための言い訳に必死になっているだけに見えます。

人は自分の生き方を肯定してもらうことを望み、否定されることを恐れます。だから、自分と違う生き方をしている者が自分と立場に近い程、容易に認められないかもしれません。そう考えれば、古くからある嫁姑問題も起こって当然です。自分の生き様を肯定するために、自分と意見が食い違う者を「悪」と認識し、私の方が正しいのだから、多少強引にでも正しい方に導かなければならないと思い、そこで繰り広げられる行動に躊躇がなくなり、相手を傷つけることも厭わなくなるでしょう。想像しただけで、恐ろしく面倒くさくなります。



「自分で決めた」「私は私」と思っている、これでいいのかと確かめたい。

時には根拠のない自信に満ちたり、そうかと思えば、急に理由もなく焦燥感に駆られたりする。ちょっとした日常の変化で、気持ちも左右されているような気がする。

己の根っこにある価値観とは、どのようなものだろうと思います。子どもの頃に生き延びていくために習得しているものは、無意識の域の中に存在し続け、追い込まれていく状況に顔を出すように感じます。それは、よく身体が疲れた時に弱い部位に症状が現れるのと似ている。

いつもは冷静に考えられますが、自分の古傷に触れると、悪い癖が出る。さほど恐ろしくないものに敏感になって恐怖に落ちる。そんな時は、周りと同じようにしなくてはと焦ることがあります。我が家だけ違うことをしていないか心配になり、誰々さん家の〇〇ちゃんが塾に行き出したと聞けば、我が子も行かせないといけないのではないかと「我が子」を見るのではなく、周りを見て安心したがつている自分に気づきます。子どもの頃、親から周りとは比べられる言葉を数多く言われ、傷ついた経験がそうさせているのかも知れません。

他にも、高校生になった子どもの帰宅時間がいつもより遅く、心配もするがイライラして不機嫌

になっていることに気づきます。心配することとイライラすることはイコールではないので、怒りはどこからか由来しています。もしかしたら、自身の子ども時代、門限が厳しくて友人と遊んでいても気もそぞろになっていたことを思い出しているのかも知れません。あるいは、幼少期に夜に恐怖を感じても誰も慰めてくれず、一人で耐えていた経験が喚起されて不安になっているのかも知れません。そこに加えて、自分は親の顔色を優先してやってきたのに自分の子どもは私をないがしろにしていると八つ当たりした怒りをぶつけているのかも知れません。

ある人から、子どもから馬鹿にされたら大人の沽券にかかわると厳し過ぎる態度に出してしまうことがあると相談されたことがあります。それは、大人である自分が何かを恐れているのでしょうか。年少期から大人に従うことを強制されてきて、自信を持ってない部分を子どもが本能的に刺激しているのかも知れません。自分が冷静に考えられないと気づいたとき、自分の古傷がうずいているのでしょうか。私たちは、生きてきた中でいろいろな経験をし、時には苦い思い出もできるものです。

では、自分が認められた感じた時は、何が起きているのでしょうか。自分の存在を認められた、それは自分の考えや思いに共感してもらえた時だと思います。人が作り出す文化の中には、何が正義かをあらゆる角度から問いかけてきて、その作品から情動が動くと、それを他者と共有したくなります。そして自分と同じように感じていたのだとわかると嬉しくなって、自分の感覚は間違っていないのだと安心します。話も盛り上がりやすし、高揚感も得られます。

人は群れを成して生き延びてきた種なのだから、周りを気にしてしまうことを避けることはできないのでしょうか。どのような価値観であれ、他者との共有なしには成立しないようです。